

《《《》》》》
象徴的な加藤紘一邸放火

「われわれが自分の国に居るときに信じているのは、一人の人間が、他国の友人であって、同時に自分の国には忠実にして献身的な市民のままでいられるということである。それが、われわれが貴殿に観ている流儀である」

1987 年 12 月、ミハイル

・S・ゴルバチョフ(当時、ソ連共産党書記長)は、初めて米国を訪れた折、パーティーに招かれたジョージ・F・ケナン(歴史学者)に、このように語りかけた。

筆者には、このゴルバチョフの言葉こそは、「冷戦の終結」の風景を象徴したもののように思える。ケナンは、冷戦初期には米国防務政策立案室長として対ソ「封じ込め」政策の立案を主導し、後に駐ソ大使に転じた折には、ソ連政府から「ペルソナ・ノン・グラータ」(好ましからざる人物)として入国を拒否された。

ゴルバチョフは、昔日には「敵方の謀将」であったケナンに対し、「他国の友人であ

って、同時に自分の国には忠実にして献身的な市民」と語りかけたのである。

一般的にいえば、政治家や外交官だけではなく一般市民にとっても、「他国の友人であって、同時に自分の国には

「他国の友人」を罵るのが愛国者か

忠実にして献身的な市民」であらうとすることは、大事な徳目である。ただし、「他国の友人」としての立場と「自国には忠実にして献身的な市民」としての立場を両立させることは、実際には殊の外、難しい。

この難しさを象徴的に物語っているのが、先刻、加藤紘一元自民党幹事長の邸宅が放火され全焼した一件である。

加藤氏自身は、外交官出身としての来歴から、「中国の友人であって、同時に自分の国には忠実にして献身的な市民」であらうとしてきたのであろう。

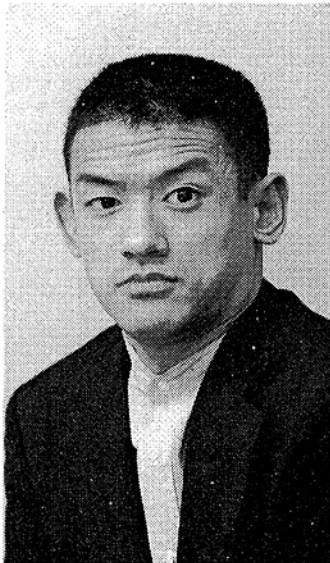
しかし、現在の対中感情の悪化という客観情勢を前にしたとき、加藤氏が模索したよ

うな「中国の友人」である立場は、「自国には忠実にして献身的な市民」である立場とは相容れないものと解され、「中国の友人」であることが拒否しようという姿勢こそが、「自分の国には忠実にし

たては「知米派」論客として知られた清沢淵は、戦時

にあってしまったけれども、戦前期の日本では、意図したにせよ、せざるにせよ、「米国の友人」であることが苦難を呼び寄せる因であった。たとえば「知米派」論客として知られた清沢淵は、戦時

正論



政治学者 兼任講師
東洋学園大学
櫻田 淳

て献身的な市民」であることの証しと断ずる雰囲気が出て上がっている。

加藤氏の災難には、そのような雰囲気が出て上がることが影を落としている。

《《《》》》》
「米国の友人」標的の時も

もっとも、加藤氏の場合には、「中国の友人」であることが災難を招く

中、「これで臣節を全うした」といえるか、もっと戦争を避けるために努力しなければならなかったのではないかと一日中煩悶した」という日米開戦の日の感慨を自らの日記に書き残したけれども、その当時には言論活動の機会を奪われていたのである。

我が国は、国際協調の堅持の上にこそ国家の存立が成り立つている。そのような国情を前にすれば、「自国には忠実にして献身的な市民」である立場と「他国の友人」である立場とが互いに相容れないものと解する向きくらい、有害なものはない。我が国の

我が国の利益には何ら貢献せず

にして献身的な市民」としての姿勢を何より強調する点において、主観的には「愛国者」であるかもしれないけれども、客観的には「亡国の徒」と呼ぶべき存在である。

《《《》》》》
対外関係の多様さ損なう

そうした人々の言動は、我が国が普段から保つべき対外「人間関係」の多様さを損ねるものであるからである。

日露戦争期の「露探」に始まり、戦後の「洋娼」「米帝のイヌ」や近年の「媚中派」に至るまで、他の国々への姿勢を挙げて他の人々を罵る言葉は、枚挙に暇がない。しかし、そうした言葉は我が国の利益には何ら貢献しない。

筆者は、自らの価値観や信条に照らし合わせる限りは、「米国の友人」であっても「中国の友人」であることにはないと思っているけれども、他の人々が「中国の友人」であることを妨げる気はない。政治家、外交官、学者などの言動を観察する折には、そのことの意味は絶えず留意されるべきであらう。

(さくらだ じゅん)